The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鳥取県倉吉方言の聞き手目当ての文末表現「ニ」について
Author(s)	大塚, 杏未
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2016, 14, p. 76-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55610
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 14 号（2016 年 3 月）76-93

鳥取県倉吉方言の聞き手目当ての文末表現「ニ」について

大塚　杏未

【キーワード】鳥取県倉吉方言、ニ、ノダ、情報提示、聞き手目当て

【要旨】

本稿では、情報提示をその機能とする、鳥取県倉吉方言の聞き手目当ての文末表現「ニ」を取り上げ、その基本的性質について記述した。基本的性質を考える上で先行研究の「のだ」の枠組みを用い、対人的ムードの「のだ」相当で、かつ命題処理度が小さい場合でのみ適格になることを確認した。さらに先行研究の枠組みにはない条件として、「ニ」は聞き手の無知に対して当然であると考えていて、かつ情報確定度が大きい場合に適格になると分かった。以上をまとめると、「ニ」は以下のような性質をもつ。

(a) 聞き手目当て性が高い

(b) 聞き手が知らなくて当然の情報だと話し手が想定している場合の情報提示を主な機能とする

(c) 情報は、前もって自分が知っており、確定的なものでなければならない

そしてこのような性質を満たしながら、談話の中では、話題導入、理由付け、聞き手を説得する為の再度の主張などを行うことができるということを確認した。

1.　はじめに

鳥取県の中部（鳥取県倉吉（くらよし）市と東伯郡）で話されている方言（以下倉吉方言[1)]）には「ニ」という文末表現がある。

(1) そういえば、バンド始めたニ。（そういえば、バンド始めたんだ。）

(2) A：明日学校休むから。
　　B：え、何で。
　　A：骨折したニ。（骨折したんだ。）

(3) A：最近、毎日部活があるんだ。
　　B：へー、じゃあなかなか遊ぶ時間がないね。
　　A：そう、もう本当大変だニ。（そう、もう本当なんだ。）

「ニ」はこのように、共通語の「のだ」と置き換えることができる場面で使用される。そして「ニ」が担うのは（1）～（3）を見ると分かるとおり、「のだ」の機能のうちでも、話者が発話時に既に持っている情報を、それを知らない聞き手に提示する機能である。その

1) 倉吉市は鳥取県中部地方の中心地にあたり、地元の人は倉吉市以外の町も含めて中部地方を「倉吉」と称することがある。そしてそこで話されている言葉についても「倉吉弁」「倉吉の方言」と称することが多いので、今回はこの名称を採用する。中部地方にあたる倉吉市、東伯郡の位置は 3 頁の図 1 参照。

ため、(4)(5)は同じく共通語の「のだ」と置き換えることができる例文であるが、新規情報の提示を担っていないために、「ニ」が使用できない。[2)]

(4) *あれ、今日は電車がすいてるな。あ、そっか、今日は祝日だニ。
(あ、そっか、今日は祝日なんだ。)

(5) *(ニュースを見ながら)へー、北海道では雪が降ったニ。
(へー、北海道では雪が降ったんだ。)

本稿では、このような特徴をもつ「ニ」の用法についての分析を試みる。「ニ」は「ニー」と長音になることもあるが、特に使い分けはないと思われるので区別しない。

ちなみに倉吉方言には、共通語の接続助詞「のに」にあたる、接続助詞「ニ」も存在する。これは文末表現「ニ」とは異なり、若年層ではあまり使用されない。

(6) この暑いニ、遊園地に行くだかえ。(この暑いのに、遊園地に行くの。)

(7) うちげの息子、もう大学生だニ、自炊もようせんだよ。
(うちの息子、もう大学生なのに、自炊もできないんだよ。)

(8) 外でご飯食べて帰るかー。せっかく夜ごはん用意しとったニ。
(外でご飯食べて帰るの?せっかく夜ごはん用意していたのに。)

この「ニ」は(8)のように文末詞的な使用が行われることもある。しかし用法が大きく異なるため、本稿ではこのような接続助詞「ニ」については触れない。

本稿の構成は次のとおりである。まず2節で他方言における方言文末詞「ニ」についての先行研究を紹介し、3節でそれらとの比較も行いながら、倉吉方言「ニ」がどのような特徴を持つか、簡単に確認する。次に「ニ」の基本的性質を考えていくので、まず4節でその際使用する枠組みとして、共通語「のだ」の先行研究について説明する。そしてそれを踏まえて5節で倉吉方言「ニ」の基本的性質を考察する。6節では、「ニ」が談話の中で使用される時の特徴について確認し、最後に7節でまとめを行う。

なお以下では、本稿で注目する方言形式「ニ」をカタカナ表記で示し、その他は引用部分を除いて漢字かな混じり文で表記する。また「ニ」以外の方言形式についても、注目すべきものについてはカタカナ表記で示す。適格性の判断は筆者(1993年生まれ、0~18歳まで鳥取県北栄町[3)]、18歳〜現在まで大阪府箕面市在住)の内省によって行う。

2) 文法的に不適格な文には「*」を、不自然な文には「?」を付す。
3) 北栄町は倉吉方言が話されている鳥取県中部地方にあたる。2005年に大栄町と北条町が合併してできた町であり、それ以前の区画でいえば筆者の居住地は北条町にあたる。

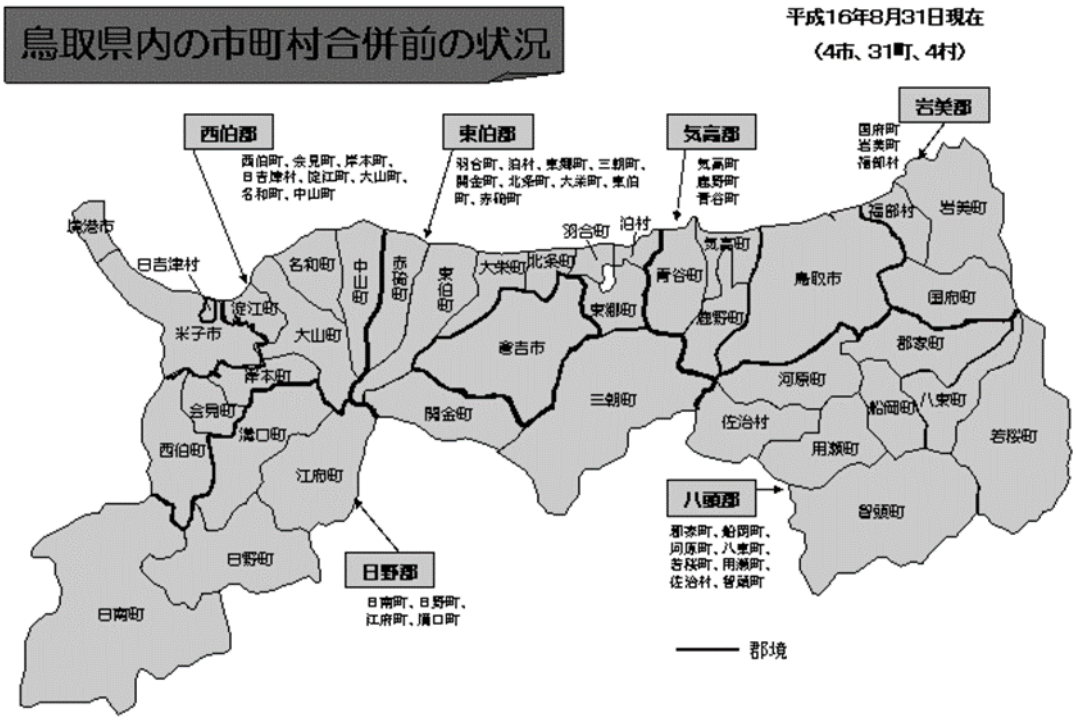


図１　鳥取県の合併前の地図（とりネット／鳥取県公式ホームページより引用）

2.　他方言における方言文末詞「ニ」

方言文末詞「ニ」は各地で見られ、それらについての先行研究も多数見られる。そこでまずは他方言における文末詞「ニ」の用法を確認する。

全国的にみると文末詞「ニ」をもつ方言は多く、藤原（1953）によると、常陸や北陸路その他の日本海沿岸や、南薩・内海島嶼・阿波東岸・熊野路・伊勢湾奥・伊豆などでみられるが、総じて退化の傾向にある。友定（1981）は転成文末詞「ニ（ニー）」の全国分布について概観している。そしてその用法を「告知」「勧誘」「反語」「問いかけ」に分けて、各方言がどの用法を持つかを考察している。

（9）アンマリ　オコッタラ　マタ　バカン　サレルニ。
　（あんまり怒ったら、また馬鹿にされるよ。）　［告知・奈良県吉野郡］

（10）モー　ヤミョー　ニ。クレルデ。
　（もうやめようよ。日が暮れるよ。）　［勧誘・岡山県新見市］

（11）ナニガ　イケヨ　ニ。トーイネヤ　ゾ。
　（どうして行けるものか。遠いんだぞ。）　［反語・三重県鈴鹿市］

（12）サー　ドー　ショー　ニー。（さあどうしようか。）［問いかけ・香川県綾歌郡］

このうち告知用法は、佐藤（1977）の三重県鈴鹿市方言や又平（1998）の愛知県三河方言、久米（2010）の静岡県浜松市方言の記述でもみられる用法である。そしてこれらの先

行研究で、告知用法の「ニ」は共通語訳では「よ」相当とされており、「相手に、信ずべき情報を提供しようとする姿勢の訴えことばである。提供する情報に注目させ、注意を喚起するのにはたらく（佐藤 1977:174）」ものである。

3. 倉吉方言における文末表現「ニ」の概要

3.1. 他方言との違い

本稿で述べていく倉吉方言の「ニ」は 2 節で述べた先行研究における分類にはない、情報提示の「のだ」相当のものだと考える。情報提示という機能から考えると、これは友定（1981）の分類の中でいえば告知用法に近いものに思われる。しかし他方言の先行研究で挙げられている告知用法の「ニ」の例文は、倉吉方言の「ニ」と置き換えが不可能である。例えば告知用法のうちの注意喚起や命令といった機能をもつ例文では、倉吉方言の「ニ」が不適格となる。

（13）信号赤だニ！（信号赤だよ！）　［注意喚起-浜松市方言-久米（2010）］

（14）行くニー。（行くよー。）　［命令-浜松市方言-久米（2010）］

（15）信号赤｛*だニ／だデ[4]｝！（信号赤だよ！）　［告知-注意喚起-倉吉方言］

（16）行く｛*ニー／デー｝！（行くよー。）　［告知-命令-倉吉方言］

そのため告知用法をもつ「ニ」とは、別物と考えることが妥当だと分かる。

一方で倉吉方言の「ニ」について触れている先行研究が、いくつか見られる。しかしそれらで述べられていることは、本稿の主張とは異なっている。友定（1981）は鳥取県内の方言における「ニ（ニー）」について、接続助詞の用法のみ指摘し、文末詞化は見られないとしている。そしてその理由として、「室山敏昭氏のご教示（友定 1981:118）」により、「山陰では、「～ダニ。」という文末形式が頻用されており、「ニ」だけが文末詞化しにくかった（友定 1981:115）」という可能性を指摘している。このように友定（1981）の調査では、山陰側に転生文末詞「ニ（ニー）」はみられなかったと結論づけている。しかし一方で「室山敏昭氏より、鳥取県の東伯町、泊村、羽合町、青谷町[5] など中央部[6] では、若年層に、「―キタニー。」「―イカンニー。」など告知用法（筆者の判断）がさかんであるとのご教示を得た（友定 1981:118）」とも、同論文内で述べられている。

また、藤原（1986）では、東伯郡[7] 内で（17）のような「よ」相当の「ニ」文末詞が報告されている。

（17）ダイタイ　オマヤー　ヤケダ　ニ。（だいたいお前はやけくそだよ。）

このように先行研究では、倉吉方言の「ニ」を、「よ」と置き換えられる告知用法相当の文末表現として捉えている。しかし筆者の内省では、先述したとおりそうとは考えられな

4） 倉吉方言における「よ」相当の告知用法は、「デ」で表す。ちなみに、久米（2010）では浜松市方言の「ニ」は、関西方言の「で」に近いように感じるという記述がある。

5） 現在では合併して名前や区画が変わっている。旧市町村区画については図 1 参照。

6） 青谷町を除き、ここでの「中央部」とは、倉吉方言が話されている中部地方と同義である。しかし、青谷町は本稿で倉吉方言が話されているとしている鳥取県中部（倉吉市と東伯郡）には含まれていない。

7） 「東伯郡」とは、倉吉方言が話されている地域である。位置については図 1 参照。

い。友定（1981）で指摘されている「―キタニー。」「―イカンニー。」は、それぞれ「―来たんだ。」「―行かないんだ。」と「のだ」相当の意味になる。また藤原（1986）の用例（17）も「やけくそだよ」という意味にはとれず、「やけくそなんだ」ととるのが自然である。

これらのことにより、筆者が内省する倉吉方言の「ニ」は、他方言における文末詞「ニ」だけでなく、先行研究で報告されている倉吉方言「ニ」とも異なる用法を持っていると考えられる。そこで筆者が使用する、情報提示の用法をもつ「ニ」について、その用法を記述することを本稿の目標とする。

3.2.　形式的特徴

用法について述べる前に、倉吉方言の「ニ」の形式的特徴を簡単に確認しておく。

3.2.1.　生起環境

「ニ」は、主節の文末に生起し（18）、従属節中にはあらわれない（19）。

（18）この間、モグラを見たニ。

（19）*この間モグラを見たニけど、すぐ逃げちゃった。

また「ニ」は、動詞・形容詞の終止形など、共通語でノダ文とした時に「んだ」となる場合にはそのまま後接できる（20）（21）。一方で共通語での名詞や形容動詞の終止形のように、共通語でノダ文とした時に「なんだ」となる場合には、断定辞「だ」を介して「だニ」となる（22）（23）。

（20）昨日、髪切ったニ。　＜動詞＞

（21）なんだか今日は体調が悪いニ。　＜形容詞＞

（22）この髪の長い子が、私の妹だニ。　＜名詞＞

（23）公園の桜がとてもきれいだニ。　＜形容動詞＞

「のだ」は共通語では「のです」と丁寧体にすることができるが、「ニ」の場合は丁寧体を持たない。丁寧体を使用する必要がある場合、倉吉方言でも「です」を使用する。ただし、共通語とは異なり、準体助詞「の」は介さない。

（24）*今度パーティーをするニです。

（25）今度パーティーをするです。

3.2.2.　文タイプ

「ニ」は平叙文でしか使用できない。

（26）私、犬を飼っているニ。　〔平叙文〕

（27）*どこに遊びに行くニ？　〔WH 疑問文〕

（28）*ピーマン食べられるニ？　〔Yes-No 疑問文〕

（29）*この椅子、運んでニ。　〔依頼〕

（30）*早く掃除終わらせろニ。　〔命令〕

（31）*宿題終わるまで遊ぶなニ。　〔禁止〕

（32）*きっと上手くいくだろうニ。　〔推量〕

この点でも、(10) ～ (12) で挙げた岡山・三重・香川で使用されている「ニ」とは異なる。

3.2.3.　他の終助詞との共起

「ニ」は倉吉方言に見られる「や」・「な」・「で」・「わ」などの終助詞と共起することはない。「ニ」が使用される場合には、単独で使用される。

(33) 今度いとこが結婚する｛*や／*な／*で／*わ｝ニ｛*や／*な／*で／*わ｝。

3.2.4.　省略形

「ニ」の使用で、形式面で特徴的なものに (34) のような省略形がある。

(34) A：田中先生の授業をとることになっちゃった。
B：　えー、あの先生課題多いんでしょう？
A：｛そうだニ／だニ｝。(そうなんだよ。)

相手の発話に対し「その通りである」という評価を与える「そうなんだよ」相当の形式は基本的には「そうだニ」となる。しかしこのとき「そう」を省略して「だニ」だけでも同じ意味で使用することができる。このような省略形が可能なのは、「そうだニ」相当の場合のみである。

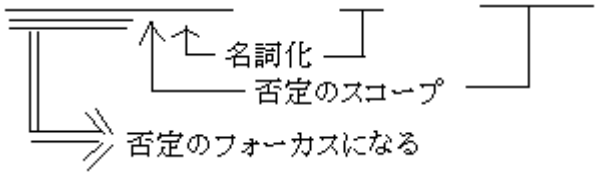
4.　先行研究における「のだ」の枠組み

次に、倉吉方言「ニ」の基本的性質を検討したい。「ニ」は、共通語「のだ」と近い性質をもっている。そこで本稿では「ニ」の基本的性質を述べるにあたって、先行研究における「のだ」の枠組みを使用する。使用するのは、共通語「のだ」の機能について分類した野田 (1997) の枠組みと、大阪方言「ネン」を分析するために、その分類の下位にさらにスケールを設置した野間 (2013) の枠組みである。4 節ではこれらの枠組みについて、説明する。

野田 (1997) は「のだ」をスコープの「のだ」と、ムードの「のだ」に大別した。

スコープの「のだ」は文の一部を名詞化する効果をもつ。通常、否定や疑問においては述語がフォーカスされる。しかしスコープの「のだ」は、その前の部分を名詞化し括ることによって、それを否定のスコープ (否定などの作用が及ぶ範囲) に入れることができる。そのためスコープの「のだ」が使われると、述語以外をフォーカスすることができる。(35) は、スコープの「のだ」を使用した例文である。(35) の場合、「悲しいから泣いた」という部分が「の」によって名詞化され、否定のスコープに入っている。そして、その中の「悲しいから」という部分が否定のフォーカスになっている。

(35) [悲しいから泣いた]　　の　　ではない。



(野田 1997：33)

一方、ムードの「のだ」は話し手の心的態度を表すものである。野田 (1997) はこのム

ードの「のだ」を、さらに「対事的」か「対人的」か、また「関係づけ」か「非関係づけ」かに注目し、下位分類している。ここで「対事的」とは「話し手が、認識していなかった事態を把握した」ということを指し、「対人的」とは「話し手は認識しているが、聞き手は認識していない事態を聞き手に提示する」ことを指す。また、「関係づけ」とは、「「のだ」がある事態 Q を、その状況や先行文脈 P と関係づけている」ことを指し、「非関係づけ」とは「P と関係づけているのではなく、Q を既定の事態としている」ことを指す。これをまとめたのが表 1 である。

表 1　ムードの「のだ」の分類（野田 1997:67）

	対事的ムードの「のだ」	対人的ムードの「のだ」
関係づけ	Pの事情・意味として Qを把握する	Pの事情・意味として Qを提示する
非関係づけ	Qを（既定の事態として） 把握する	Qを（既定の事態として） 提示する

そしてそれぞれの用法は、以下のように使用される。（野田 1997:67）

（36）山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。　（対事的関係づけ）

（37）そうか、このスイッチを押すんだ。　（対事的非関係づけ）

（38）僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。　（対人的関係づけ）

（39）このスイッチを押すんだ！　（対人的非関係づけ）

野間（2013）は大阪方言「ノヤ」「ネン」の意味記述のために、このうちの対人的ムードの「のだ」を、さらに「命題処理度のスケール」を用いて下位分類している。

命題処理度とは、「ノダの直前までの命題の内容を、話し手がどれだけ頭の中で処理したか」という度合いを示すものである。ここでいう「頭の中で処理する」とは、「当該の命題内容を、発話時に新たに得た、あるいは思い出した」といった行動や、「相手の発話に対して適切な答えを用意する」といった行動を指す。（野間 2013:12）

（40）【唐突に】実は私今日誕生日｛??ナンヤ／ヤネン｝。（実は私今日誕生日なんだよ。）

（41）A：C さんはどこに行ったの？
B：C さんは今いないよ。買い物に行ってる｛?ンヤ／ネン｝。
（買い物に行っているんだよ。）

（42）A：C さんはどこに行ったの？
B：そういえばどこに行ったんだろう。
あ、さっきまでここにあった C さんのかばんがない。
たぶん買い物に行ってる｛ンヤ／?ネン｝。（多分買い物に行っているんだよ。）

以下、例文に関する野間（2013）の説明を簡単に引用する。（40）は話し手にとってはいわば「自明」の情報の提示であるから、思い出す必要がなく、また自分から唐突に言った

ことなので、内容の準備も不要である。それゆえかなり命題処理度が小さいということになる。それに対して、(41) と (42) は、相手の問いに対して答えているという点で、「相手の発話に対して適切な答えを用意する」という処理が必要であり、(40) よりも命題処理度が大きい。さらに (41) と (42) を比較すると、(41) は既知の事実であるためすぐに答えることができる。一方で (42) は、未知の事実に対し「かばんがなくなっていることから推論し、買い物に行っていることを把握する」という頭の中での処理を経てから答えている。そのため、(41) よりも (42) の方が、さらに命題処理度が大きいことがわかる。ちなみに対事的ムードの「のだ」をこのスケールにのせると、「把握」のプロセスがあるという点で (42) に似ているが、聞き手に提示するというプロセスがないという点で異なっている。

ここで大阪方言においては、「ノヤ」は命題処理度が大きい場合、「ネン」は命題処理度が小さい場合に使用される。そのため適格性は (40) ～ (42) で示した通りになっている。

以上、野田 (1997) と野間 (2013) に基づき「のだ」の分類を確認した。これをまとめたのが、野間 (2013) から引用した表 2 である。(ただし野間 (2013) では、この表に大阪方言のノダ形式の適格性が併記されている。本稿ではこの大阪方言のノダ形式に関する情報は関係がないので、削除している。) 本稿ではこの表 2 の分類を基本とする。ここで野田 (1997) の分類にある、関係づけか非関係づけかという点は、「ニ」の適格性に関与しないと思われるので、基本的性質を考えるうえでは区別しないこととする。

表 2　「のだ」の分類 (野間 2013:15 から引用し一部削除)

<table>
<tr><td colspan="3">のだ</td></tr>
<tr><td rowspan="3">スコープ</td><td colspan="2">ムード</td></tr>
<tr><td rowspan="2">対事的</td><td>対人的</td></tr>
<tr><td>大 ←――→ 小
命題処理度</td></tr>
</table>

5.　倉吉方言「ニ」の基本的性質

5.1.　先行研究の枠組みに基づく「ニ」の基本的性質

まずは、「ニ」の基本的性質を、表 2 の「のだ」の分類に当てはめて確認する。「ニ」は、スコープの「のだ」、対事的ムードの「のだ」では使用できず、対人的ムードの「のだ」の用法のみを持つ。以下、5.1 節の例文は野田 (1997) と野間 (2013) のものを使用する。また「ニ」が不適格となるものについては、参考に適格となる倉吉方言の形式も併置するが、詳述はしない。

(43) 智子に言った {*ニ／デ} ない。幸子に言った {*ニ／ダ／ダン}。
　(智子に言ったのではない。幸子に言ったのだ。)　(スコープ)

(44) 【友人が運転しているのを見て】あ、あいつ運転する {*ニ／ダ／カー}。
　(あ、あいつ運転するんだ。) (対事的関係づけ)

(45) へーえ、伊達が勝った {*ニ／ダ／カー}。
　(へーえ、伊達が勝ったんだ。)　(対事的非関係づけ)

（46）咲いないよ、旅行に行ったニ。

（咲いないよ、旅行に行ったんだ。）　（対人的関係づけ）

（47）あのね、さっき道を聞かれたニ。それで、教えてあげたら、すごく丁寧にお礼言われたニ。嬉しかったなあ。

（あのね、さっき道を聞かれたの。それで、教えてあげたら、すごく丁寧にお礼言われたの。嬉しかったなあ。）　（対人的非関係づけ）

このように「ニ」は、（46）（47）のような対人的ムードの「のだ」相当の場面でしか使用できない。そのため対人的ムードの「のだ」の特徴である、「話し手は認識しているが、聞き手は認識していない事態を聞き手に提示する」という機能に特化していると考えられる。そしてこのような性質ゆえに、聞き手を必ず必要とする。独り言で「ニ」は使用できない。

また、命題処理度も適格性に関係している。

（48）【唐突に】実は私今日誕生日だニ。（実は私今日誕生日なんだ。）

（49）A：C さんはどこに行ったの？

B：C さんは今いないよ。買い物に行っとるニ。（買い物に行っているんだ。）

（50）A：C さんはどこに行ったの？

B：そういえばどこに行ったんだろう。

あ、さっきまでここにあった C さんのかばんがない。

たぶん買い物に行っとる｛*ニ／ダワ｝。（たぶん買い物に行っているんだ。）

「ニ」は「ネン」と同様、（50）のような命題処理度の大きい例文では不適格[8]となる。つまり（48）や（49）のような、前もって自分がもっている情報の提示でしか使用できず、「発話時に頭の中での処理が必要な状況」にはそぐわない。

以上を整理すると、「ニ」の特徴について次のことがいえる。

（51）a. 聞き手目当て性が高い

b. 聞き手の知らない情報の提示を主な機能とする

c. 情報は、前もって自分が知っているものでなければならない

そして表 2 に当てはめて考えると、「ニ」の適格性は表 3 のように示すことができる。

表 3　「のだ」の分類と「ニ」の適格性

のだ		
スコープ	ムード	
	対事的	対人的 大 ←――→ 小 命題処理度
×	×	× ○

○…適格、×…不適格

8）野間（2013）では、命題処理度の大きなものについて、「不適格」ではなく「不自然」としていることから、「ネン」と「ニ」では許容度が異なる可能性がある。

5.2.　枠組みの再考

5.1 節では、先行研究の枠組みを使用し、「ニ」の基本的性質を確認した。しかし「ニ」の基本的性質は、これだけでは説明できない。なぜなら、野田（1997）の分類で対人的ムードの「のだ」とされており、命題処理度も大きくないと判断できるが、「ニ」が不適格となる場合が存在するためである。それは例えば次のような例文である。

（52）【親に叱られて】もう、うるさい｛*ニ／ケ／ワ｝！（もう、うるさいんだよ！）

（53）もう放っておいてくれ、俺はここで死ぬ｛*ニ／ダケ｝。（俺はここで死ぬんだ。）

これらの例は（51）の条件はすべて満たしているものの、「ニ」が不適格になる。このことにより、「ニ」の性質を述べるのに（51）の条件だけでは不十分であることが分かる。そこで、（51）の条件を満たしつつ不適格となる例文を確認することで、基本的性質をさらに検討したい。具体的には、（51b）に「聞き手の無知に対する当然性」という観点を追加し（5.2.1 節）、（51c）に「情報の確定性」という観点を追加して（5.2.2 節）考えてゆく。以下、5.2.1 節と 5.2.2 節の例文は、すべて筆者の作例である。

5.2.1.　聞き手の無知に対する当然性

まず、「聞き手の無知に対する当然性」という観点から、「ニ」の適格性を考える。「ニ」が適格となる条件に「（51b）聞き手の知らない情報の提示を主な機能とする」ということがあった。ここで、この「聞き手の無知」について話し手がどう捉えているかで、（51b）は大きく二つに下位分類ができる。ひとつは「聞き手が当該情報を知らなくて当然である」と捉えている場合であり、もうひとつは「聞き手が当該情報を知っていて当然であるのに、知らない」と捉えている場合である。以下の（54）（55）はこのうち「聞き手が当該情報を知っていて当然であるのに、知らない」と捉えている後者にあたる例文である。この時「ニ」は不適格となる。

（54）【ふざけていて花瓶を割ってしまった友人に】
だからやめろって言った｛*ニ／ダン｝。（だからやめろって言ったんだ。）

（55）話しかけんでや！今勉強しとる｛*ニ／ダデ／ダン｝！
（今勉強しているんだよ！）

（54）では、聞き手が事前に「やめろと言った」という情報を受け入れず、ふざけることをやめなかったために花瓶が割れてしまったという状況である。つまり話し手はこの「やめろと言った」という情報を、「聞き手が知らなくて当然」である完全な新規情報として提示しているのではない。事前に注意をしているのだから、「聞き手が知っておくことが当然だった情報（しかし知ってもらえなかった情報）」として提示している。（55）でもまた、話し手は「今勉強しとる」という情報を「聞き手が知らなくて当然」と思っているわけではない。むしろ「勉強していることが見て分からないのか」という態度である。つまり当該情報を「聞き手が気づいて当然である情報（しかし気づいてくれていない情報）」として提示している。

このように、「聞き手が当該情報を知っていて当然であるのに、知らない」という、聞き手の無知を当然としない情報提示の場合、「ニ」が不適格となる。逆に言えば、聞き手の無

知を当然のものとする場合のみ、「ニ」が適格となるということである。

このことを踏まえ、他の例も確認する。（56）（57）は、当然守るべきルールの提示を行うものである。

（56）【これから出かける小さい子どもに対して】

信号はちゃんと守る｛*ニ／ダデ／ダヨ｝。（信号はちゃんと守るんだよ。）

（57）【廊下を走っている生徒に対して】

廊下を走っちゃいけん｛*ニ／ダデ／ダヨ｝。（廊下を走っちゃいけないんだよ。）

このとき話し手は、これらのルールを聞き手が事前に知らないことは想定していない。（56）の場合、子どもが「信号を守る」ということを知ってはいるが忘れている可能性があると思って提示している。また（57）の場合、生徒が「廊下を走ってはいけない」と知っていながら、わざとその情報に反した行動をとっていると思って提示している。要するに、それぞれのルールをこの場で喚起させるために提示しているのであって、そもそもこれらのルールは「聞き手が知っていて当然」のものだという前提なのである。そのため、「ニ」が不適格となっている。

そしてこの「聞き手が知っていて当然」という条件には、実際に聞き手が当該情報を知っているかどうかは関係ない。重要なのは、話し手が「知っていて当然だ」と捉えているかどうかである。そのため、（58）（59）のように、客観的にみると聞き手が事前に当該情報をもちえない状況であっても、話し手が「知っていて当然だ」と決めつけていれば「ニ」が不適格となる。

（58）A：早く宿題しちゃいなさい。

B：今やろうとしとる｛*ニ／ダン｝！（今やろうとしているんだよ！）

（59）【A が B に対する批判を述べた結果、B が落ち込んだ様子である】

A：あ、ごめん、言い過ぎた。

B：いい｛*ニ／ダケ｝、いい｛*ニ／ダケ｝。（いいんだ、いいんだ。）

これらの例文で提示されている情報は、客観的にみると聞き手には知りえないものである。しかし話し手の発話のニュアンスとしてはどれも、「聞き手がその情報を知らない」ということを受け入れているものではない。

例えば（58）の状況で、B の気持ちである「今やろうとしている」ということは、A は知らなくて当然である。（場合によっては、「今やろうとしている」というのは嘘である可能性もある。）それにも関わらず、B は「今やろうとしているのに、どうしてそれに気づかず宿題をやることを命令してくるのか」という態度をとっている。要するに、相手が知らないことを理不尽に責めたてながら、反発しているのである。B のこの態度は、A の無知を当然としていない態度といえる。また、（59）でも同じように、「（気にしなくて）いい」という B の気持ちは、A には知り得ないものである。しかしこの場面で B はこの「（気にしなくて）いい」という情報を、「A が事前に知っていて良かった情報」として提示している。そうすることで「『（気にしなくて）いい』ということを知っていて良かったのだから、つまり謝罪する必要はなかった」ということを聞き手に認識させようとしているのである。この場合は（58）と異なり、当該情報を知らない聞き手を責めているわけではない。しか

しAの無知を当然としないという態度は共通している。

このような例文でも「ニ」は不適格である。このことから、実際に聞き手がその情報をもっていて当然かどうかということではなく、話し手がそう思っているかどうかが適格性に関わっていることが分かる。

ここまで、「聞き手の無知」に対して、話し手が「当然ではない」と思っているとき「ニ」が不適格になるということをみてきた。そこで次に、このような性質をもつために、同じような場面での発話でも、聞き手の無知に対する態度が変わると、「ニ」の適格性も変わることを確認したい。まず（60）は、聞き手の無知を当然としていない状況であるので、「ニ」が不適格となっている。

（60）A：この問題ってどうやって解くの？

B：【同級生の友達に対して】ああ、この問題は相加相乗平均を使って解く｛??ニ／ダデ／ダヨ／ダン｝。（ああ、この問題は三平方の定理で解くんだよ。）

（60）において、聞き手は学習到達状況が近い同級生である。そのため「相加相乗平均を使って解く」ということは、聞き手も知っていておかしくない情報である。つまり話し手は、聞き手の無知を当然としておらず、もっているはずの情報として喚起を促しているのである。このような場合に「ニ」を使用すると、「ニ」の「聞き手は知らなくて当然である」という意味のせいで、聞き手が「相加相乗平均を知らなくて当然」と捉えているように聞こえてしまう。その結果、子ども扱いしているかのようになる。

一方で（60）と同じような「聞き手に教える」という場面での発話でも、（61）や（62）のように、教える情報について聞き手が知らなくて当然と話し手が考えている場面では、「ニ」が使用できる。

（61）A：この問題ってどうやって解くの？

B：【小学生の妹に対して】お前にはまだ難しいと思うけど、相加相乗平均ってやつを使って解くニ。（相加相乗平均ってやつを使って解くんだ。）

（62）A：君が作ったこのパズル、どうやって解くの？

B：【同級生の友達に対して】ああ、これはね、ここをこうやって、こうすれば、解けるようになっとるニ。（解けるようになっているんだ。）

（61）では、聞き手が情報を知り得ない相手である。また（62）では、話し手が情報量で圧倒的優位な立場にたてる情報を提示している。このように当該情報を聞き手が知らなくても当然と捉えられている場合、適格となる。このよう適格性の違いからも、聞き手の無知に対する態度が「ニ」の性質と関係していることが分かる。

5.2.2.　情報の確定性

次に、「情報の確定性」という観点から、「ニ」の適格性を考える。「ニ」が適格となる条件に「（51c）情報は、前もって自分が知っているものでなければならない」ということがあった。この（51c）に「情報の確定性」という観点を追加すると、「確定事項として前もって把握している」場合と、「確定ではないが前もって把握している」場合に下位分類できる。以下の（63）（64）（65）は、このうち後者の「確定ではないが前もって把握している」

場合に当てはまる例文である。この時「ニ」は不適格となる。

（63）【子供に向けて】仕方ないよ。大人になるにつれ、純粋な心を忘れていく。
きっとそういうもの｛*だニ／なんだケ｝。（きっとそういうものなんだ。）

（64）どいてや！そこは俺が座る｛*ニ／ダケ｝！（そこは俺が座るんだ！）

（65）俺な、将来は漁師になる｛*ニ／ケ｝。（俺な、将来は漁師になるんだ。）

（63）の「きっとそういうものだ」も、（64）の「そこは俺が座る」も、（65）の「将来は漁師になる」も、発話の場で把握した情報ではなく、話し手が既に把握している情報の提示である。しかしこれらは、その情報の「確定性が小さい」ために「ニ」が不適格になっている。[9)]（63）は「きっと」が付加されていることからも分かるように、あくまで話し手の推測として提示されている情報で確定的とはいえない。また（64）で提示されている情報は、話し手の一方的な宣言であるので、実際に座るかどうかはまだ確定していることではない。そして（65）でも、提示されている情報は話し手の未来の行為であり、実際に漁師になれるかはやはりまだ確定していない。このように「未確定」な情報を提示している（63）（64）（65）のような例文では、「ニ」が不適格となると考えられる。

このことは、これらを以下のように確定的な情報とすることで、「ニ」が適格となることからも分かる。

（63’）【子供に向けて】仕方ないよ。大人になるにつれ、純粋な心を忘れていく。
絶対そうなるものだニ。（絶対そうなるものなんだ。）

（64’）ごめん、そこは俺の席だニ。（そこは俺の席なんだ。）

（65’）俺な、将来は漁師になりたいと思っとるニ。（漁師になりたいと思ってるんだ。）

（65”）俺な、一人っ子だから将来は家を継いで漁師になるニ。（漁師になるんだ。）

（63’）では、客観的に見た「大人になるにつれ、純粋な心を忘れていく」という命題自体の不確定さは変わっていない。しかし「絶対」という言葉を付し、話し手の中ではそれが事実であるという態度で提示されているので、適格となる。また（64’）の場合、（64）と異なり、そこに座ることが決定事項である状況となっているので、「ニ」が適格となる。そして（65’）の場合、命題は不確定事項であるが、それについてそう「思っている」ということ自体は現在起こっている事実であるので「ニ」が使用できる。また（65”）のように未来のことでも約束された事実になれば、当然これも「ニ」が使用できる。

また、「ニ」は推量表現と共起しない。仁田（2009）で、推量は、「ダロウ」とそのバリアントおよび「マイ」で表されると述べられているが、「ニ」はこれらの表現に後接できない。

（66）*明日は雨が降るだろうニ。

（67）*きっとうまくいくでしょうニ。

（68）*これだけ待っても来ないんだから、もう今日は来まいニ。

9）松丸（1999）では、対人的ムードの「のだ」相当の京都市方言「ネン」について、命題の真偽判断が話し手にとって「確定」の場合にしか用いられないという特徴を持つために、問いかけや命令の機能としては使用できないと述べられている。そのため「ニ」は「ネン」と似た性質をもつ可能性がある。

これらの推量表現が使用されている場合もまた、「確定性が小さい」ために「ニ」が使用できないと考えられる。

5.3. 基本的性質まとめ

以上をまとめると「ニ」が適格となる条件について、表 4 のように示すことができる。

表 4 「のだ」の分類と「ニ」の適格性

<table>
<tr><th colspan="6">のだ</th></tr>
<tr><td rowspan="5">スコープ</td><td colspan="5">ムード</td></tr>
<tr><td rowspan="4">対事的</td><td colspan="3" rowspan="2"></td><td colspan="2">対人的</td></tr>
<tr><td colspan="2">大←→小
命題処理度</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td></td><td>小←→大
情報確定度</td></tr>
<tr><td colspan="2">聞き手の無知
に対する態度</td><td>当然ではない</td><td>×</td><td>×</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td>当然である</td><td>×</td><td>× ○</td></tr>
<tr><td>×</td><td>×</td><td colspan="4"></td></tr>
</table>

対人的ムード用法は、聞き手の無知に対して当然だと考えているか否かでまず分けることができる。またそれと同時に、命題処理度のスケールをもつ。そして命題処理度の小さいものの内でさらに、情報確定度のスケールを設けることができる。「ニ」が使用できるのは、対人的ムード用法にあてはまる場合のうち、聞き手の無知に対して当然であると考えていて、かつ命題処理度が小さく、同時に情報確定度が大きい場合である。

このことを踏まえ、5.1 節で確認した「ニ」の特徴（51）を修正する形で、「ニ」の基本的性質を以下のように考える。

（69）a. 聞き手目当て性が高い

b. 聞き手が知らなくて当然の情報だと話し手が想定している場合の情報提示を
主な機能とする

c. 情報は、前もって自分が知っており、確定的なものでなければならない

6. 談話の中で使用される「ニ」

6 節では、（69）のような基本的性質を備えた「ニ」が、談話の中で具体的にどのように使用されるのかを確認していく。なお、6 節の用例はすべて筆者の作例である。

（69）の特徴からも分かるように、「ニ」は基本的には以下のような聞き手が知らない新規情報を提示する「告白」の用法で使用される。

（70）A：昨日すごい雪だったね。

B：本当にね、そうそう、あの雪でうちの水道、凍っちゃったニ。

（あの雪でうちの水道、凍っちゃったんだ。）

（71）A：今度のパーティー、楽しみだね！
B：あ、それがな、実は用事ができて行けんくなっちゃたニ。ごめんね。
（あ、それがね、実は用事ができて行けなくなっちゃたんだ。）
（72）A：今度クラスでお楽しみ会するの。
B：へー、いいなあ。
A：うん、すっごく楽しみだニ。（うん、すっごく楽しみなんだ。）
（73）A：B さんは文化祭の演目についてどう考えてるの？
B：うーん、本音は演劇がやりたいニ。（うーん、本音は演劇がやりたいんだ。）
でも、準備が大変だしクラスのみんなが嫌がるかなあ。

一方「ニ」が提示する新規情報は、単なる新規情報というだけではなく、話題の導入部分にあたることもある。それは例えば（74）（75）のような場合である。

（74）あんな、昨日、京都に行ったニ。そしたらたまたますごく美味しいパンケーキやさん見つけて。すっごく美味しかったニ。
（あのね、昨日、京都に行ったんだ。そしたらたまたますごく美味しいパンケー
キやさん見つけて。すごく美味しかったんだ。）
（75）A：実はバイト始めただけど、そこのシフトがきつくてもうやめたいニ。
（実はバイト始めたんだけど、そこのシフトがきつくてもうやめたいんだ。）
B：へー、そうなんだ。どんな感じ？？
A：用事がない日は全部入れみたいな感じで。

このように、話し手が話題を展開していくときの導入部分で新規情報を提示するときにも、「ニ」を使用することができる。そして話題導入としての発話で「ニ」が使用されると、話し手がターンを保持し、話題を続けることを聞き手に予期させる効果がある。そのため（74）のように話し手が話題を展開したり、（75）のように聞き手が相づちをはさんだりすることが自然である。

さらに「ニ」は、提示する新規情報を、以下のように、先行文脈の理由や原因という位置づけで提示することもできる。これは野田（1997）のいう関係づけ用法にあたる。

（76）もうやだ、ずぶ濡れだよ。急に雨が降ってきたニ。（急に雨が降ってきたんだ。）
（77）見て、新しい服買っちゃった。安くなっとったニ。（安くなっていたんだ。）
（78）A：頼む、お金貸してくれ。
B：いやだよ。
A：親が入院して、どうしても必要だニ。
（親が入院して、どうしても必要なんだ。）
（79）A：汗すごいね、お疲れ！
B：うん、寝坊しちゃったけ、走って来たニ。（走って来たんだ。）
（80）A：その怪我、どうしたの？
B：今朝、ころんだニ。（今朝、ころんだんだ。）

（76）（77）のように直前の自分の発話内容に理由づけすることもできれば、（78）のよ

うに、相手のターンを挟んで、その前の自身の「お金を貸してくれ」という発話に対し、理由付けすることもできる。また、(79) のように「汗すごいね」という聞き手の発話に対して理由を与えたり、(80) のように理由を尋ねる相手の質問に対して理由を答えたりする場面でも、「ニ」を使用することで、当該発話が先行文脈の理由になっていることを示すことができる。

さらに、一見新規情報には見えない情報を、「ニ」が提示できる場合もある。(81) (82) で「ニ」を使って提示している情報は、先行発話と同じ内容の繰り返しである。しかし「ニ」が適格となる。

(81) A：隣のクラスの転校生、めっちゃかわいかった！
B：えー、でも女子の「かわいい」は信用できないからな・・・。
A：いやいや、ほんとにめっちゃかわいいニ！
（いやいや、ほんとにすごくかわいいんだよ！）

(82) A：私、ピーマン苦手だからあげる。
B：まあそう言わずちょっとくらい食べなよ。
A：ごめん、ほんとに無理だニ。（ごめん、ほんとに無理なんだ。）

(81) (82) で「ニ」が使用されている発話は、自分の発話に対し聞き手が反発した場合に、もう一度自分の意見を主張する「再度の主張」である。この時、文末に「ニ」をもつ発話は再度の提示になるので、「聞き手が知らなくて当然の情報だと話し手が想定している場合の情報提示を主な機能とする」という条件に一見反すように思われる。しかしこの発話は、新規情報を提示した第一発話が受け入れられなかったために、内容を強調した上で言い直しているだけである。そのため、二度目の発話であるものの、「聞き手が知らない情報を提示したい」という発話意図は第一発話と同じである。このことを踏まえると、「ニ」を使用したこの「再度の主張」は、相手の不理解を責めているわけではなく、「理解して欲しい」と考えもう一度発話している説得的な用法である。そのため「聞き手が知らなくて当然の情報だと話し手が想定している場合」という「ニ」が使用できる条件に当てはまり、適格となる。

一方で同じく再度提示するものでも、(83) のように聞き手に対し、「一度目の提示でその情報を受け入れて当然なのにどうして受け入れていないんだ」という態度で提示しているものは、不適格となってしまう。

(83) A：早く寝なさい。
B：【寝ようとしない】
A：早く寝なさいって言っとる｛*ニ／ダン｝。
（早く寝なさいって言っているんだ。）

このように再度命令するものは、「一度言ったのにどうして理解していないんだ」というような、相手がその情報を一度目で聞き入れていないことを責める姿勢での発話である。これは要するに、相手が既に情報をもっていることを当然としているので不適格となる。

逆に言うと、「ニ」が使用された場合は再度の提示であっても、相手が理解していないことを認識した上で説得しようとしているニュアンスを、示すことができるということであ

る。

7.　まとめと今後の課題

本稿では、「ニ」のもつ基本的性質について、まず先行研究の「のだ」の枠組みに基づいて考察した。これにより、対人的ムードの「のだ」相当で、かつ命題処理度が小さい場合でのみ適格になることを確認した。さらに先行研究の枠組みにはない条件として、「ニ」は聞き手の無知に対して当然であると考えていて、かつ情報確定度が大きい場合に適格になると分かった。これをまとめると、「ニ」の基本的性質は以下の通りである。

(a)　聞き手目当て性が高い

(b)　聞き手が知らなくて当然の情報だと話し手が想定している場合の情報提示を主な機能とする

(c)　情報は、前もって自分が知っており、確定的なものでなければならない

「ニ」はこのような性質をもっているために、基本的には聞き手の知らない情報を提示する「告白」の用法で使用される。しかし実際の談話の中では、単に新規情報を提示するというだけではなく、話題導入を行ったり、先行文脈に理由付けを行ったり、聞き手を説得する為に再度の主張を行ったりすることもできるということを確認した。

今後の課題として、倉吉方言におけるほかの「のだ（よ）」相当表現との意味範囲の比較を行うことが必要だと考える。本稿では必要に応じて「ダケ」「ダデ」「ダン」など、他の「のだ」相当表現を併記した。これらの意味範囲は重なっているところもあるが、それぞれが必ず置き換え可能というわけではないと思われる。たとえば本稿で紹介したように、「ニ」が不適格となる例文で、「ダケ」「ダデ」「ダン」などが使用されている。また一方で、関係づけ用法では「ニ」しか使用できない場合が多いと思われる。このような「のだ」相当表現の意味分布について考察することを今後の課題とする。

【参考文献・参照ウェブサイト】

久米史織（2010）『浜松市方言ニの文末詞的用法』大阪大学 2009 年度提出修士論文.

佐藤虎男（1977）「方言文末詞の研究　―三重県鈴鹿市江島町の方言の文末詞―」藤原与一編『方言研究叢書　第 7 巻』pp.103-198，三弥井書店.

友定賢治（1981）「転成文末詞「ニ（ニー）」の分布について　―中国地方を中心に―」『島大国文』10，pp.110-119，島大国文会.

仁田義雄（2009）『仁田義雄日本語文法著作選 2　日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房.

野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版.

野間純平（2013）「大阪方言におけるノダ相当表現：ノヤからネンへの変遷に注目して」『阪大日本語研究』25，pp.53-74，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

藤原与一（1953）「日本語表現法の文末助詞―その存立と生成―」『国語学』11，pp.64-74，国語学会.

――――（1986）『昭和日本語方言の総合的研究　第三巻　方言文末詞＜文末助詞＞の研究（下）』春陽堂.

又平恵美子（1998）「三河方言の文末形式の記述的研究　―2―」『筑波日本語研究』3，pp.9-17，筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室.

松丸真大（1999）「京都市方言における「ノヤ」「ネン」の異同」『阪大社会言語学研究ノート』1，pp.61-73，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

とりネット／鳥取県公式ホームページ　http://www.pref.tottori.lg.jp/12516.htm
（最終確認日：2016/02/27）

おおつか　あずみ（大阪大学学部生）
u025918j@ecs.osaka-u.ac.jp